

史苑

第十五卷第四號 (通卷第七十一號)

昭和十九年十月

科擧の政治的意義

加藤 繁

科擧は支那に於ける官吏任用試験であつて、隋から始まり、自來清末に至るまで、一千二百餘年の間繼續した。科擧とは科目に依つて士を擧げるといふ意味で、科目とは試験の種類、即ち秀才・進士・明經・明法などを指す言葉であつたが、後ち試験が一種類だけに爲ることゝなつても、やはりこれを科擧と呼んだ。要するに科擧は試験に依つて天下の才俊を選び出して官吏とする制度である。この制度の設けられる前には如何にして官吏を任用したのであるか。一應簡單に申し述べて置かう。

戰國以前はいふまでもなく封建制度の行はれた時代である。封建制度に於いては、諸侯がその地位を世襲すると共に、その臣下たる卿大夫士も亦たその身分を世襲した。さうして卿大夫士にはそれ〴〵その地位に應じて高き若しくは低き官職が與へられたのであるから、廣く人材を物色して官に任するやうなことは殆ど行はれなかつたのである。封建制度は戰國半過ぎから次第に崩壊に向ひ、秦の始皇帝が海内を統一するに至つて全く廢止せられ、諸侯も卿大夫

士も無くなり、皇帝自ら全國を統治し、あらゆる官吏は皇帝が自由任免することゝなつた。いはゆる郡縣制度は、この新しい官吏制度・官僚制度をいふに外ならぬ。さうしてこの制度は秦亡び漢興るの後に於いても、渝ること無く引續いて行はれたのである。

これより先、戰國時代、儒家の學者は賢者を尊び用ふべきことを盛に説いた。この説は世襲階級の制度即ち封建制度が動搖して新官僚が將に起らんとする時、時勢の要求に従つて唱へられたものであるが、秦を経て漢に至るに及んで、この精神に則つて一種の制度が設けられた。それは賢良・方正・孝廉等を擧げるの法である。この制度は文帝に始まり、武帝以後、後漢時代に互つて盛に行はれたものであつて、各郡國の長官に命じて賢良・方正等の士を擧げて都に送らしめ、朝廷ではこれに對して、題を出して論策を專せしめ、その成績に應じて官を與へたのである。これは天下の人材を物色して、その地位の如何を問はず、これを任用せんとするものであつて、戰國の末に儒家の唱へたところを實行したものと謂ふことが出来る。

然るに三國に至つて、魏の文帝の時、九品官人の法といふものが設けられた。九品とは上・上・上・中より下・下に至る九等であつて、各地方に、地方官の外に、人物の鑒識を掌る中正といふ官吏を置き、中正をしてその地方の人物を視察して、誰は上・下、誰は中・上といふやうに九つの等級に分類し、その中の勝れた人物を朝廷に推薦せしめ、朝廷ではそれに官職を與へた。これが九品官人の制度であつて、その後晋より南北朝に互つて三百餘年の間行はれたのである。この制度は本來公平に地方の人材を擧げんとするもので、その動機は賢良・方正の制度を一層完備せしめんとするに外ならぬ。然るに晋から南北朝に互る時代は門閥が重んぜられ、豪族が勢力を振つた時代であつて、中正の官に任ぜられたものも門閥家であつたところから、上・中・上・下等の高き品級には高門世族の子弟を以つて充て、

家柄卑しきものは専ら卑い品級に充てられるやうになり、初に公平に人材を分類せんとした九品の制は、一變して門閥の子弟が高位高官に上る門徑と化したのであつた。

されば隋が南北を統一するや、九品官人の法を廢し、新に科擧の制度を設け、試験に依つて士を取ることゝした。即ち試に應ずるの志あるものは、自らその本籍ある州に届け出で、州の官吏は、これに對して試験を行ひ、成績のよいものは都に送り、都で更に試験を行ひ、合格したものには官を與へたのである。この制度と從來の官吏登用法とどう違ふかと云へば、これまででは、賢良方正にしても、九品官人にしても、地方官若しくは中正をして其の地の人物を取調べてそれを朝廷に推薦せしめた。それゆへ官吏がたとひ公平無私であつても鑑識を誤れば優秀な人物でも推薦を洩れることになり、若し公平でなく間違つた考を以つて人物を品第するに於いては、益よい人が洩れて、つまらぬものが推薦されることになるわけであつて、その弊害は南北朝時代に十分に現れて居るのである。然るに隋の科擧制度に於いては、各地方の優秀な人物が他の推薦を待たず、自ら進んで試験を受けるから、官吏の推薦にまつる弊害は一掃され、天下の英才をして十分に其の力を現す機會を得しめるのであつて、これまでに比べて頗る自由なる又た公平なる制度と謂つてよい。全體、隋の國家統治の根本方針は門閥を抑制することゝ、武に優せ文を修めることゝにあつた。前にも一言したやうに、南北朝時代には門閥の勢力が盛であつたが、同時に武力が尙ばれ、豪族も地方官も勝手に私兵を養ひ、その爲め種々の弊害を生じたのであつた。それゆへ隋は門閥と武力とを抑へることをその大方針としたのであるが、科擧制度を樹立したのもこれが爲めであつて、これに依つて門閥子弟の官界進出を制限し、同時に武力に依頼するの風を打破し、文を好むの風尙を鼓吹せんとしたのである。唐興るに及んでも治國の大計を優武修文に置くことは隋と同様であり、従つて科擧の制度も隋のそれを踏襲し、尙ほ、幾多の補足改善を施した。宋に至つ

て科擧は益盛に行はれた。唐代では猶ほ門閥の勢力が残り、科擧出身者をして十分に力を伸ばすを得ざらしめる憾みがあつたが、宋に至つては門閥の力は愈衰へ、科擧出身者にあらざれば高官に登ることが困難に爲り、名門の子弟も争うて科擧に應ずるやうになつた。元代は蒙古人が峻嚴なる階級制度を設けて漢人を壓迫した時代であつたが、しかしその中頃以後にはやはり科擧を行つた。明清二代は唐宋の遺制をうけ繼いで、科擧に重きを置き、官吏は専らこれに依つて採用せられた。

さて科擧即ち一種の學術試験に依つて官吏を採用する制度の目的は、官吏の適任者を得ること、言換へれば人材を擧用することにあることは勿論である。即ち古の儒者の唱へた賢を尊ぶことが其の目的であるのはいふまでもないことである。しかしながら單純な尊賢の精神から出たものではない。前に述べたやうに隋がこの制度を創設した際には、門閥を抑へ、且つ武を偃せ文を修めんとすることが其の主なる動機であつたが、唐宋明清各代に於いて引續いてこれを行つた理由はどうであつたらうか。門閥の勢力は宋以後は衰へたり、これが爲めに特に科擧制度の存在を必要とするやうなことはなかつた。武を偃せ文を修めて世の中の平和を維持するといふことは、唐代でも宋代でも、又た明清時代でも必要であつて、科擧はこれ等の時代に於いても引續いて偃武修文の使命を有したに相違ない。然らば科擧の主なる目的は、人材を擧げるといふことゝ、武を抑へ文を擧げるといふことゝの二つであつたといふに、決してさうでなく、他にいま一つ重要な目的が存したのである。それは何か。この問題を闡明するには、科擧制度そのものをもう少し検討しなければならない。

隋及び唐の科擧制度に於いては、先づ州に於いて試験を行ひ、成績のよいものを都に送つた。これを名づけて郷貢といふ。都では尙書省の禮部に於いて更に試験を施行した。これを省試といふ。即ち中央と地方と二段の試験が行は

れたのである。宋代では州の試験を解試と云ひ、禮部の試験はやはり省試といつたが、この外に新に殿試といふものを加へた。殿試とは宮中講武殿に於いて皇帝親試の意味を以つて行はれる試験であつて、太祖の時に始まる。かくして三段の試験が行はれることゝなつた。試験施行の年については屢變改があつたが、宋の英宗の時から三年一回と爲り、さうして解試は秋を以つて行はれ、省試・殿試は次年の春行はれた。初め解試の及第者と地方別との間には何の關係も定められず、従つて或る路からは全然及第者を出さないやうな場合もあつたが、北宋の半過ぎに至り、州ごとに及第者の定員を定めた。その數、少きは一人、多きは八九人若しくはそれ以上にも及んだ。しかし省試・殿試の及第者については、かゝる規則は設けられなかつた。

明代では三段の試験が行はれた。初には各省で行ふ。これを鄉試といふ。宋の解試に當るものである。次には禮部で行ふ。これを會試といふ。次には宮中で行ふ。これを殿試又は廷試といふ。鄉試の及第者には、初めには定員の制は無かつたが、仁宗の洪熙元年 各省ごとにこれを定めた。即ち、

南	直	隸	八〇名
北	直	隸	五〇名
江	西		五〇名
浙	江		四五名
福	建		四五名
湖	廣		四〇名
廣	東		四〇名

科擧の政治的意義 (加藤繁)

河	南	三五名
四	川	三五名
陝	西	三〇名
山	西	三〇名
山	東	三〇名
廣	西	二〇名
雲	南	二〇名
交	趾	二〇名

であつた。この後、定員の數には變動があつたけれども、各省それ／＼定員を設けることは動かなかつたのである。尙ほ明代では、會試の及第者にも地域に依つて定員を置くの制が設けられた。明の太祖は支那南北いづれにも偏しないやうに及第者を取ることに注意し、北人の及第者の少いのを見て、自ら試験をし直し、多く北人を取つたこともあつたが、仁宗の時、

南 人 一六
北 人 一四
南 卷 五五名
北 卷 三五名
中 卷 一〇名

の割合を以つて及第者を取ることゝした。南卷は應天府・浙江・江西・福建・湖廣・廣東及び蘇州府・松江府であつて、北卷は順天府・北直隸・山東・山西・河南・陝西であり、中卷は四川・廣西・雲南・貴州及び鳳陽府・廬州府・滁・徐・和三州である。かくして各省ごとに定員を設けたのではないけれども、支那を南・北・中の三區域に分つてそれ／＼一定數の及第者を出さしめることゝせられたのである。

清朝も明に仿つて郷試・會試・殿試三段の試験を行つた。さうして郷試の定員を各省別に定めることも、國初以來行はれ、その定員も明代よりも餘程増加し、總計一千二百餘人に及んだ。會試については、初には明に模して南・北・中卷の制を用ひたが、康熙五十一年、これを罷めて、各省ごとに及第者の員數を定めるとゝした。但し豫め定員を設けず、會試の行はれる際、皇帝自ら省の大小、人口の多寡等を參酌して適當に及第員數を定めるのであつて、その趣意は及第者の或は一省に偏多に或は一省に偏少なる弊を救ひ、各省子弟をして均等に科擧及第の恩恵に與らしめることにあつたので、それは此の時降された上諭に明に述べられて居る。

全體、單に人材を擧げ用ひるといふ目的の爲めならば、どういふ地方からでも勝れた人物を見出せばよいはずである。唐代には各州の郷貢に定員が無く、又た禮部の試に於いても地方別に及第者の員數を定めるやうなことは無かつたのである。然るに宋代になると、各州の解試及第者の定員を定めた。これは、優秀なる人物を擧げるよりも、天下各州の子弟をして、過多過少の弊無く、均平に中央政府の試験に與る機會を得しめようとするものである。明代に至つては、これを州毎に定めずして省毎に定め、稍々餘裕を持たせたが、その精神は同一である。そればかりでなく、

明代では省試の及第者を南・北・中の三地域に振分け、支那帝國内各地方の人をして會試及第の榮譽に與らしめようとした。さうして清代には更に一步を進めて、隨時各省ごとに會試及第者の數を定めることとした。これは優秀者を獲得するを第一とせずして、進士及第の名譽を全國各省に適宜に分配することを第一とするものと謂はなければならぬ。

官僚制度の支那に於いては、官吏となることが非常な榮譽であつて、又た實際の利益を伴つて居る。知縣は正七品の卑官であるが、これを勤めること三年ならば一生生活して餘りある財産を得ることが出来るといはれた。況んや二品・三品の高官をや。さうして官吏となる最も主要な路は科擧であつた。されば科擧に及第し、進士となるといふことは、古來、士流の子弟の最も熱烈に願望したところであるが、しかも支那十八省は頗る廣く、その人口は宋代既に一億を算へ、清代に及んでは三億・四億に達した。科擧に應ずるものは此の内の一部たる士人階級の子弟であるが、しかも其の數が中々多く、三年に一回、一三百人の進士を出だすくらゐでは、受験者のほんの一小部分が及第するだけで、多數は落第の憂き目を見たのである。しかし官吏となり、その榮譽と利益とに與るには、此れが最も主要な門戸であるから、士人の子弟は潮の如く押し寄せ、中には數十年に亘り、幾回となく試験を受け、首白きに至つて猶ほ及第せず、風塵の卷に老ゆるものが少くなかつたのである。

かゝる次第であるから、科擧制度は、自然の勢として、人材獲得の手段であるばかりでなく、同時に、天下の士人階級に官吏たるの榮譽と利益とを分ち與へる機關と爲つたのである。即ち現在の政權が天下の士人に對して富貴に與る機會を與へる機關と爲つたのである。これを善用し利用すれば、天下各地方の人心を中央政府に繋ぎ、中央政權と利害を共にせしめることが出来ると共に、若し濫用の途を誤まれれば、反對の結果を來す處がある。これが歷代の朝廷

が科擧制度の爲めに深く心を用ひ、種々綿密なる規定を設けた所以であつて、各省の郷試及第者の定員を定め、又た會試の及第者を南・北・中の地域別に定め、進んでは各省ごとに定めた如きは、特にさういふ考慮に本づいたものと思はれる。

抑も支那(支那本部)が龐大な地域であつて、しかも統一されて一大帝國を爲したことに、自然的・人的・様々の理由があるであらうが、其の重要な一つとして、科擧制度の行はれたこと、委しく云へば、科擧に依つて全國の士人に富貴に與る機會を與へ、各地方の人心を中央政府に引きつけ繋ぎとめたことを擧げなければならぬ。古來、謀反人の中には高位高官に上つたものもあるけれども、科擧に落第し、富貴に與る機會を失つたものも少なくない。水滸傳を見ると、初に梁山泊の盜賊團の頭領となつたものは王倫で、水滸傳の編者はこれを落第の秀才と呼んで居る。又太平天國の巨魁洪秀全も郷試の落第者である。かやうな例は頗る多い。これに依つても、科擧と天下の治亂と深い關係のあることが窺はれるであらう。この天下各地の人心を引きつけ、統一を鞏固にし、平和を固うするといふことは確かに科擧の重大意義であつて、勝れた政治家は皆な十分にこれを認めたやうであり、北人の及第少きを見て、試験をし直した明の太祖や、皇帝自ら各省ごとに會試及第者の數を定めることとした康熙帝の如きは、特に深く此の點を考慮したものと思はれる。科擧のことはあまり注意せられず、注意せられてもこの邊のことは閑却されて居るやうに見えるので、敢て一言した次第である。